

平成26年度

病害虫発生予察特殊報(第1号)

平成26年10月 8日

神奈川県農業技術センター

病害虫名：インパチエンスベと病

病害虫名：*Plasmopara obducens* (J. Schröter) J. Schröter

作物名：インパチエンス

1 発生経過

- 県東部の生産者栽培施設で、平成26年3月から10.5cmポットで栽培したインパチエンス(品種：‘アテナシリーズ’(半八重咲き実生系)、『スターダスト』)において、同年4月上旬より葉の黄化および葉裏に白色霜状かびを生じる症状を示す株が認められた(図1, 2, 3)。
- 同年6月上旬に当センターに上記病徴に関する診断同定依頼があり、顕微鏡観察による分生子柄の形態的特徴から、サンプル白色菌体は、べと病菌主要属のうち*Plasmopara*属であると推定した(図4)。
- 同じサンプル株罹病葉の白色菌体を回収、DNAを抽出し、rDNA-ITS領域を増幅、塩基配列を決定した結果、既報の*Plasmopara obducens*ハワイ株(Plant Dis. 98:696(2014))と100%の相同性を示した。
- 病徴、形態的特徴および遺伝子解析から、本病害は*Plasmopara obducens*によるべと病であると診断した。
- 本病害発生ほ場においては、罹病株の埋没処分を実施した。また、現時点では、インパチエンスの栽培は実施していない。
- 本病害の神奈川県内での発生確認は初めてである。なお、本病害は、平成22年6月に国内で初めて確認されたことが報告されており、平成24年5月に島根県から特殊報が発表されている。

2 病徴および生態

- 葉の裏面に白色霜状のかびを生じる。また、かびの発生した葉は黄化症状を示す(図1, 2, 3)。
- 病徴が進展すると葉の裏面全体が白色のかびで覆われ、落葉、株の枯死につながる。
- 病原菌である*Plasmopara obducens*は、葉裏の気孔から外表に分生子柄を伸長し、樹状に分岐後、円錐形の先端部に分生子を形成する。
- 罹病植物体およびその残渣が伝染源となり、分生子により空気伝染する。
- 宿主植物はツリフネソウ属の植物とされている。

3 防除対策

- (1) 発病株は確認したら、速やかにほ場外へ持ち出し、土中に埋没処理する。
- (2) 葉が濡れていると感染を助長するので、頭上灌水は避ける。
- (3) 本病害を対象として農薬登録されている薬剤はない。
- (4) 発病ほ場に設置されてるベンチなどの設備は、栽培終了後に消毒する。



図1 依頼サンプルのべと病発生状況



図2 葉裏の白色霜状かび



図3 葉裏の白色霜状かび

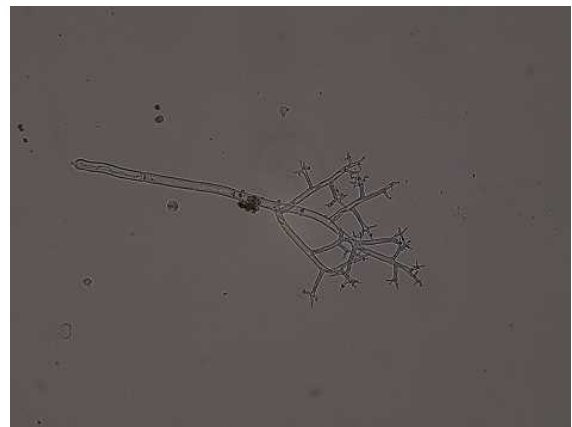


図4 光学顕微鏡により観察された病原菌の分生子柄

神奈川県農業技術センター 病害虫防除部
〒259-1204 平塚市上吉沢1617
TEL 0463-58-0333 FAX 0463-59-7411
<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f450002/>